

首里天后宮瞥見記 —宗教忌避時代の新たな信仰の行方

総合社会学科 安田ひろみ

この夏の媽祖研究会の沖縄調査において、首里天后宮は小規模ながらある意味もっとも異質な媽祖関係の施設だったといえるかもしれない。那覇の久米天妃宮、上・下天妃宮跡、久米島の真謝天后宮などは、媽祖の名を冠しているが信者がいない廟、信仰実態がない歴史的遺物、信仰はあっても仏教等と習合し別の解釈がなされているものであった。これは東京媽祖廟など少数を除き、日本の他の地でも同様であった。だが、首里天后宮の場合、「台湾の神」として外来ルーツを明示し、宗教職能者が常在して布教・宣伝に努めている現役の宗教施設である。しかも東京媽祖廟は台湾出資で信者も台湾・中国人を想定、事実上廟のシャーマンである連昭恵氏も台湾人であるのに対し、日本人が私費で設立し信者も日本人を対象にしているのである。日本人相手という点では横浜媽祖廟もそうだが、これは観光資源として設けられ、パワースポットとして認識されている。アクティブな宗教として成立しているという点だけでも、首里天后宮は真に「日本の媽祖廟」を名のれる日本では数少ない施設だといえよう。

調査日程と見事に同期して沖縄を直撃した「猛烈な台風」11号は、一時最大瞬間風速75mを記録し建物が倒壊する危険も報じられた。マスクミからは外出不能に備えて食料の備蓄が呼びかけられていた。先島を

結ぶ航空便は次々と欠航となり、われわれは石垣島、久米島での宿泊を断念せざるを得なかった。さすが台風銀座と呼ばれる沖縄であり、過去に訪れた際も大型台風とぶつかった事はあったが、風速70m級の経験はない。刻一刻と変化する台風の進路や強さのニュースを不安な気持ちでチェックしながら、調査の合間に備蓄用のカップ麺などを買い込み、沖縄本島や本土に帰れなくなった場合に備えた。昔沖縄で開催した日本民俗学会では台風襲来で偉い先生方が帰れなくなり、多くの大学で休講ラッシュになった事が頭をよぎる。そんな中とんぼ返りの日帰り8月31日は石垣、9月2日は久米での詰まったスケジュールをこなし、本島での最後の3日間の調査に臨んだ。

9月3日には台風11号は風速60mとやや弱まっており、われわれはレンタカーで首里方面に向かった。途中、媽祖を祀る八重瀬町の唐の船御嶽（トーフニウタキ）に寄ったが、傘は直ぐに壊れて全身びしょ濡れになり急遽カッパを購入した。首里に向かう途上、雨がさらに激しくなりワイパーが追いつかず、フロントガラスがホワイト・アウトの状態になったりもした。首里天后宮の當原直樹代表には直前にアポイントメントを取り、ラインで訪問時間を連絡していたが、このような天候では本当にインタビューが実現できるのか、非常に心もとなかった。だが、14:00ようやく現地に到

着すると、當原氏が一人で迎えてくれた。

首里天后宮は小さなビルの4階の1室にあり、看板には台湾中国語教室である「萬華」が併記されている。萬華は「首里天后宮恭敬會」でもあり、閩南語ではなく當原氏が独学で習得した台湾華語（北京語が少し変化したもので繁体字を用いる）を教えている。生徒は10人程度の台湾好き日本人で、媽祖信仰とは無関係だという。従って、教室で生計を立てているわけではなく、かつての自分のように台湾が好きで何度も訪台する人のために「台湾をもっと楽しめるように」始めたとのことだった。

写真1. 首里天后宮外観



(首里天后宮公式HPより)

マンションの1室を教室と併用しているため、6～8畳ほどの部屋は机と椅子が並び、首里天后宮の本体は入口脇の小さな祭壇コーナーだけである。扁額の代わりに「天上聖母」のプレートが貼られた下に20センチほどの媽祖像と侍神である千里眼と順風耳の小像が祀られている。横の壁には御神籤を収め、木製の三日月型の占具ポエを用いて神意を問う。これは道教等中国の占具であり、中国民間信仰のシャーマンである童凧の廟などでもおなじみのものだ。

私も早速無事に帰京できるかを占ってもらったが、まず媽祖に名前、生年月

写真2. 媽祖の祭壇と御神籤（左壁）



写真3. 中央に媽祖像と左右に順風耳と千里眼像



写真4. 御神籤の引き方を説明する當原直樹代表（中央）



(写真2－4は潘宏立氏撮影)

日、住所などを心の中で自己紹介し心願を祈念する。自己紹介の形にしたのは日本人に分かりやすくするためだろうが、占卜の

前に八字（生年月日時）を申告する中国・朝鮮式の占いを彷彿とさせる。その際あくまで依頼ではなく、成就するかをうかがう言葉にしなければならないという。成就するか否かは、御神籤の番号を選びこの番号でいいかポエを投げて神意を問う。否の場合は番号を改めて再度ポエで問う。御神籤を受け取ると、記された内容から心願が成就するかを読み取ることになる。なお、首里天后宮で行っている宗教行為はこの御神籤＝礼拝がメインである。

帰京が可能との託宣を無事に得て、當原氏にインタビューを開始した。當原氏は沖縄県宜野湾市出身。久米系（クニンダー）ではなく、中国とも台湾とも関係はなかった。台湾好きで訪台を重ねていた際、媽祖に救われた経験から、信者の立場で台湾の各媽祖廟に度々参詣に行っていたという。2014年くらいから台湾人道士である「師匠」から媽祖について学ぶようになり、彼の勧めもあり2017年に天后宮を作った。師匠の名前は「信仰の妨げになる」ため、出すことはできないという。媽祖（像）は台湾から勧請し師匠が個人的に分霊してくれた。（分霊先の？）台湾の媽祖廟の総本山といわれる北港朝天宮を「台湾の本山」としている。廟としての活動は、第一日曜日の月例祭、媽祖の生誕祭（旧暦3月23日）、昇天祭（旧暦9月9日）等だが、この時も通常通り御神籤を引きお守りを分けることが参詣となり、特別な儀礼等はない。

活動の目的は、日本人に平和の象徴である媽祖を広め、媽祖を介したコミュニケーションで日中関係を良くすること。広くは東アジアの平和に貢献すると考えている。信仰まで行かずとも文化としてだけでも知ってほしいという。信仰としては、不安や悩みの解消のための参拝のほかは、依頼があれば代表による祈祷も行う。祈祷は「旅行安全・交通安全・良縁成就・安産成就・家内安全・商売繁盛・無病息災・合格成就

写真5. 「天上聖母經」



(公式HPより)

など各種」を受け付けており、媽祖は海神や海上交通の神ではなく万能神とみなされている。

また、ボールペンでの写経（「天上聖母經」抜粋）もできる。ただ、普段の御神籤＝参詣の際は當原氏はやり方を教え、相談には信仰を基に応じる役割であり、シャーマンでもプリーストとでもなく、教師・カウンセラー的な存在かもしれない。現在、実際に天后宮を訪れるのは一日1～2人だそうだが、HP、インスタグラム、ラインなど公式SNSへのメールやダイレクト・メッセージでも相談が可能であり、インターネットでの活動の方が多そうである。直接来訪する信者は悩みのある人で、那覇市内の日本人女性が多く、30～50代。沖縄在住の台湾人や台湾人インバウンドもいる。

一方、恭敬會の方は「単なる中国語教室ではなく交流の場にしたい」、「媽祖信仰とは無関係」というが、会員になれば特典として、「御尊影・經本・護身符授与、會長による毎月の平安祈祷、日々の相談・助言、媽祖や中国語講習への参加」（公式HP）ができ、宗教色が濃い。現在会員は10人ほどで、台湾好きが高じて語学に関心を持つようになった台湾ファンが主だそう。

當原氏は天后宮代表であり恭敬會会長だが、服装はHPでは紫の輪袈裟様のもののかけた作務衣で、聖俗の中間的な感じであ

る。また、東京媽祖廟の連氏のような強烈なカリスマ性を醸し出す訳ではなく、控えめで穏やかな態度であった。意識変容状態で託宣や治病を行うシャーマンではなく、祈禱を行うのでプリーストに含まれる類型かもしれないが、當原氏は「自分は媽祖様に召命された」と考えている。確かに中国とも宗教とも関係がなかった普通の日本人が、遠く台湾の神を祀る宗教者となったことは、召命と解釈できるかもしれない。但し、航空運賃が安くなりインターネットが発達した現在は、台湾も媽祖も遠い異国の存在ではない。図書館や書店に行かずとも、媽祖信仰や寺廟等に関する情報はインターネットでいくらでも入手できるようになった。韓国・釜山のアルファタ・マスジッド（モスク）に勤務している若い韓国人ムスリムは、入信はインターネットで学んで決めたと言っていたが、宗教もインターネットで選ぶ時代になったのかもしれない。

だが、逆に日本では特に宗教への忌避感が強い時代になった事も言える。私の宗教関係の大学の授業では、妄信と信仰、宗教とカルト宗教を同一視している学生が多く見受けられる。オウム真理教の大量殺人の影響が大きいだろうし、最近では旧統一教会の二世信者が安倍元首相を暗殺したショックから、さらに宗教への嫌悪感、恐怖感が強まっているようだ。

首里天后宮のHPからは、當原氏の講話にそうした風潮への気遣いが見て取れる。

「信仰」という言葉を聞くと、絶対的な宗教指導者がいて信徒は盲目的にその人物に服従している、というイメージになりがちですが、媽祖信仰はそういうイメージとはかなりちがう形態になっています。まず、全体を統制するような絶対的な宗教指導者は存在しません。本山と扱われ敬意を集めるお宮でもその敬意はお宮に対してであって、その団体の長の人を崇めるわけではありません。

また、全体を管理するような教団組織も存在しません。本山を始めとして敬意の度合いが高いお宮の意向を汲むことはありますが、基本的にはそれぞれのお宮が独立して運営されています。

そういう形態のため強要されたり盲目的にさせられたりすることが起きにくい構造になっていると言えます。さらに首里天后宮では日本人にとってわかりやすいかたちで媽祖信仰をお伝えするようにしています。

（公式HPより）

HPでは「穏健な信仰」が首里天后宮のキーワードである。不安や心細さに対して心の拠り所を持つことが勧められ、そのためには「穏健な信仰」を持つことが説かれている。カルト宗教、洗脳、煩雑な儀礼、多額の献金、細かい規律など、一般的な宗教のマイナス・イメージへの反感を回避した「多神教」で緩やかな民間信仰として、媽祖信仰が説明されている。教祖、教義、儀礼、教団組織、宗教職能者の存在といった、成立宗教の要件であり長年民間信仰が軽んじられる要因であった事柄が忌避され、それが無いことが利点として述べられている訳だ。宗教が忌避される時代に合致し、民間信仰が再評価されているといえるかもしれない。また文中にある「日本人に分かりやすい」媽祖信仰もキーワードの一つである。そのため「唐の船御嶽」など沖縄の民間信仰との結びつきや、日本および沖縄各地の媽祖廟も説明されている。「日本人に寄せている」と當原氏は表現していた。

當原氏によれば、写経を勧めて「怖い。不気味だ」と言われる事があったという。仏教の正統的な功德と目されてきた写経さえ呪術的なイメージを持たれるのは、宗教をオカルトの視点で見る多くの漫画やアニメ、映画、ゲーム等が影響しているかもしれない。また、訪問の少し前、東京媽祖廟がインターネットで誹謗中傷され炎上した

事があったらしい。新大久保の駅前に突如として中国式の極彩色の巨大な廟が出現したため、「日本が中国人に乗っ取られる」「怖い」と感じたようだ。これは特にインターネットで著しい、近年の中国や中国人への反感が関係していよう。

首里天后宮のスタンスは、物理的・精神的距離が縮まったが故のこうした沖縄・日本・中国の関係性、宗教忌避の時代的風潮、インターネットやSNSの発達と裏腹の現代人の不安と孤独に対応したものだといえるかもしれない。

本稿は「ともいき研究推進センター研究助成：201302」の助成による出張で執筆したものです。なお、首里天后宮の當原直樹代表には、悪天候の中取材をご快諾頂いたことにお礼を申し上げます。HPの写真も使用させて頂き、有り難うございました。

<参考文献・参考サイト>

「日本における媽祖信仰の二極化—東京媽祖廟についての現状報告」安田ひろみ、「総合社会学部研究紀要」2021

首里天后宮HP：

<https://masosama.ti-da.net/e10191735.html>

同公式インスタグラム：

https://www.instagram.com/accounts/login/?next=%2Fmasosamashuri%2F&source=omni_redirect